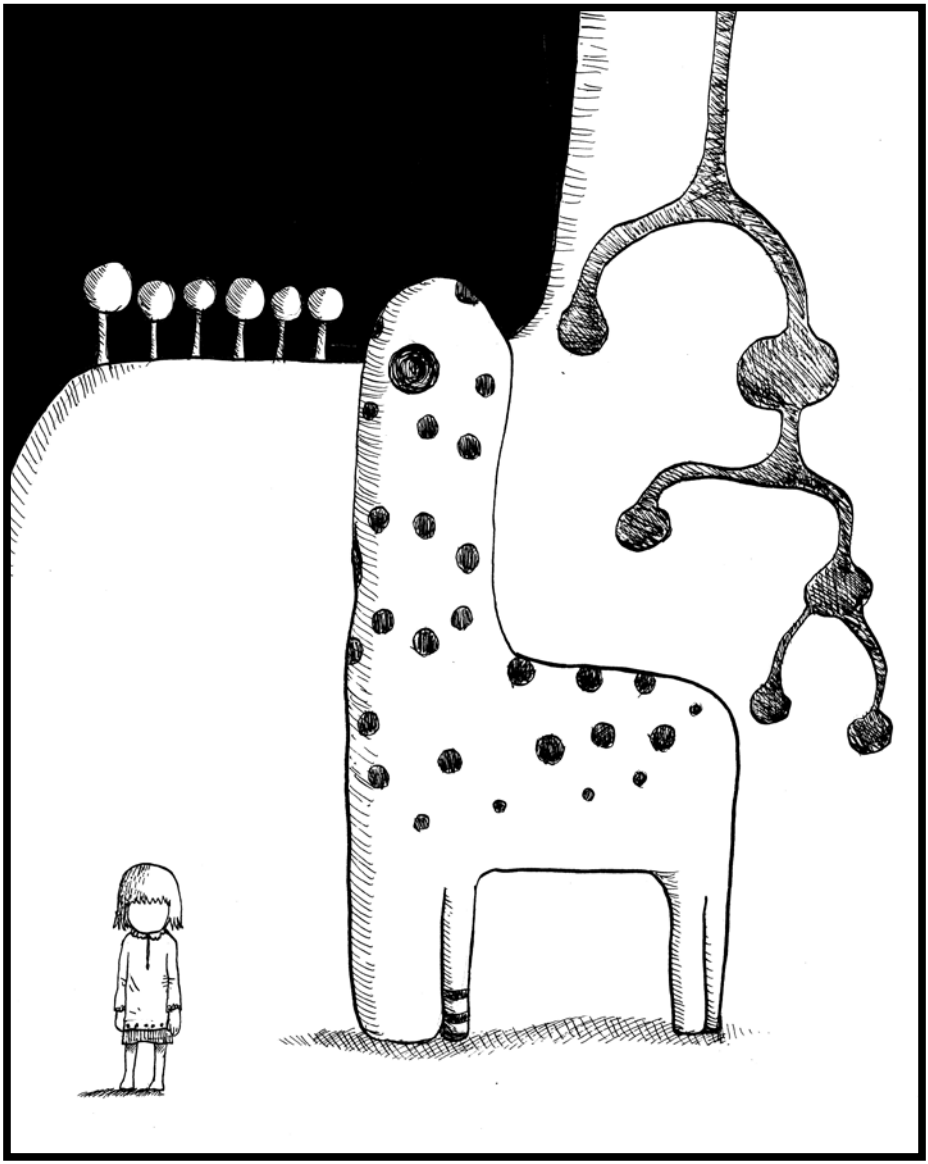
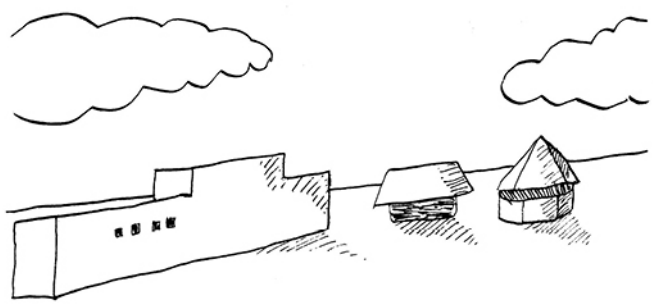


クロ新聞

いびつな場所



海に浮かぶ小島のような、田んぼの中の部落。文化財センターはそこにある。向かいには廃校。木造校舎と体育館はなく。空白と、鉄筋校舎だけが異様な存在感を放っている。駐輪場も自動販売機もない。入館無料、節電のため生暖かい。ガラス越しに働く人々の姿、体験コーナーには臨時職員の女子がいる。大きな自動扉が開くと数多の木簡、土器、石器。自動扉をくぐり、さらに奥へ。ジオラマとビデオ。誰もいない、暗くてひんやりした展示室は異空間だ。センター内には入ってはいけない部屋が多々ある。古い民具はガラス越しにしか見ることができない。隣の会議室の窓から覗き込むように民具を眺める。受付で許可をもらい二階の図書室へ。小柄な女子がハンドルを廻し棚を動かす。全国の調査報告書、遺跡関係の本、黒埼町史。持ち出し不可、有料でコピーは可。

「体験コーナーの受付時間は一六時までとなっております。」

受付で二人の男子が電話中。一人が電話を終え、僕に気づく。勾玉づくりゆっくりコース二〇〇円申し込み。チラシには（一番人気メニューだよ。丁寧に時間をかけて磨けば、ピカピカの勾玉ができあがるよ。）と記載されている。二〇〇円払うと、市の納入通知書兼領収証書が渡される。体験コーナーには年長の男子職員と女子職員。勾玉づくりはまず型紙を選ぶ。大別すると丸っこい黄金率のものと、幼虫のような細長いもの。自転車の鍵用キーホルダーにするべく小さいものを探す。年長の男子がつくった赤くて小さい小豆大の角ばった勾玉。言われなければ勾玉とわからない砕けたブロックのような勾玉を誇らしげに見せる。型紙を石に当て鉛筆でなぞる。続いてノコギリでおおまかに形を整える作業。

「やってみますか。」

「包丁で薬指の爪を切った不器用な人間ですが、大丈夫でしょうか。」

「難しいところだけ私がやりましょう。」

勾玉の凹んだ部分を年長の男子が切ってくれる。

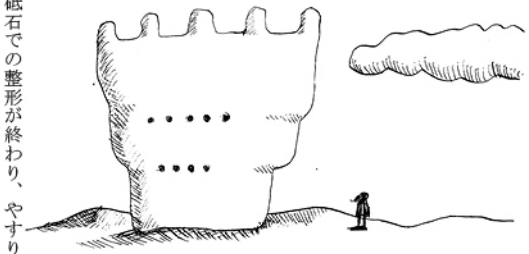
「じゃあ、Tさん。私は帰りますので。」

やることをやって年長の男子は去っていった。女子職員のTさんと二人。残り三箇所をカット。石を水につけ砥石で削っていく。

「さすが大人は綺麗に作りますね。」

休日は子供達の溜り場。土器パズル無料が人気。チラシには（タイムアタックで最速記録に挑戦だ！）と記載されている。一番簡単なパズルの最速記録は一秒。上位記録保持者は手書きの表に名前が載り、貼り出される。

「ここに載った人には土偶マグネットをプレゼントしているので、ぜひやってみてください。」



砥石での整形が終わり、やすりで仕上げていく。

「昔の人はどうやって削っていたんでしょうね。」

「私、臨時の職員なので何もわからないのです。」

目の粗いものから細かいものを順に使う。

「ゆっくりコース二〇〇円とスピードコース五〇〇円の違いは何でしょうか。」

「スピードコースは、最初のノコギリでカットするところが終っているというだけです。」

「ゆっくりコースの方がお得ですね。」

巧く形のバランスがとれなかったが閉館近いので仕上げに入る。新聞紙で擦り、ツヤ出し。

「磨けば磨くほどツヤが出ます。高校生が一所懸命擦ってツヤツヤにしていました。」

慣れない事をしたため手に力が入らなくなってくる。

「やすりあげますから家でやってみてください。」

使っていたやすりを新聞紙に包んでもらう。

「色をつけることもできます。マッキーで塗るだけです。マッキーがあれば家でもできます。油性だから大丈夫だと思うけど、もしかすると色が落ちるかもしれない。何もつけない方が安全。」

マッキーの色落ちを恐れ、彩色しない事に。最後に紐を選ぶ。

「紐を通すのに時間がかかるので土器パズルをやっていてください。」

簡単なものから順にやる。一秒は無理だが難なくできている感じがする。三番目の土器パズルのときに時間を計測。三〇秒くらいでできたと思ったが一分以上かかっていた。

「平日、人いないので涼みに来てください。」

受付の役所的なところ、立ち入り禁止の部屋で蠢く人々の影、温度・湿度・照度まで管理された展示室、子供達の溜り場になっている体験コーナー。それらが融合したいびつな場所。これからも、いびつな場所がどんどん増えていくのだろう。近くの昔からある小売店で里もなかを買う。コンビニより値段高め。年配の女子が奥に座っている。

「暑いねぇ。」

海に浮かぶ小島のような、田んぼの中の部落。田んぼの向こうに黒埼病院、ゴミ焼却場、アクアパーク、遠くに角田山と弥彦山。新幹線と高速道路が部落を横切る。ジョギングコースと体育館、図書館とゲートボール場。夕暮れ、女学生たちがゲートボールを愉しんでいる。

✦プチ小説✦

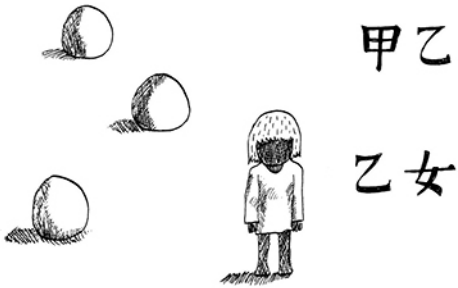
キメラ

三つの首を持つ女がいた。一つの首は鏡張り、内面を反射する。一つの首は電波受信装置、思考を受信し垂れ流す。一つの首はただ黙ってそこにいる。暗黒が映り、沈黙を受信する。不安が産まれ、首は切り落とされた。二つの首を持つ女は山向こうの雲の上へ消えた。切り口は真っ黒な洞窟となり、幻覚を視る男がそこに住んだ。火を燃やすと魚が寄ってきて、その身を焼いた。燃える魚の臭いが充満し男は意味の無い言葉を繰り返し唱える。（可燃物、不燃物、非可燃物、非不燃物）生血を吸い魚は甦る。穴を掘り泉をつくる。泉沸く洞窟で幻覚を見ながら過ごし息をひきとる。今際の際に発火し燃え移り、燃え上がる。燃える魚が掘った、ぴったりの穴に、身を横たえた。

ポエムの復権

乙女

坂の途中に木造二階建十部屋くらいの集合住宅が二軒、対になっている。気配はないが半分くらいは人が住んでいる。向かって左の一番奥、窓から外を見ると外灯の木の柱が目の前に突き刺さる部屋。網戸がなく、夜暑くなると部屋の明かりを消して蚊取り線香を焚き窓を開け放つ。灯りの下、虫が飛び交うのを眺めている。僕は留守番を頼まれている。正確には留守ではなく乙女がいる。乙女は齢三〇前後。甲高い声と浮世離れした所作は成人とは思えない。僕は乙女と呼んでいる。留守番中は本を読んでいるか、呆けているか、乙女を眺めている。気になった時だけ埃を拭き取る。床の板と板の間は爪楊枝を雑巾でくるんで拭く。電球の傘の上を拭いていると乙女が真似を始める。乙女の行動パターンは、僕や他の誰か（この家では乙女と、乙女の母親としか会ったことがない）の真似をしているか、理解できない言葉（僕には「ずんだぁん」とか「とろんぱーせふ」と聞こえる）で鳴くか、じっと動かずに何も語らない。目は開いているが何も見ていない。僕にとっての好ましい乙女は廃人のような、抜け殻の乙女だ。最近、動かない時間が増えた気がする。何故、こんな事をしているのかというと、数年前フリーマーケットに出店した時、見知らぬ女が話しかけてきて、この仕事を斡旋してくれたのだ。一回二〇〇円。実際は五〇〇円のうち三〇〇円を女がピンはねしていた。女は他に怪しげな美術品の販売をしていた。支払い能力に不安があったのか僕には売りつけようとしなかった。女がその気になれば興味のない高額の美術品を買わされていただろう。僕はお色気に弱い引っ込み思案な学生さんだから。あの日、女は茶色のぴったりしたスーツから太腿を覗かせていた。今、女は去り、お金は直接もらっている。最初は五〇〇円もらっていたが、いつの間にか二〇〇円に値下がりした。色気のない、絵に描いたナマズのような乙女と二人きり。この仕事をつづけているのは、夢を見るためだ。歳をとったせいか夢らしい夢を見なくなった。せいぜい学校に遅れる夢と、留年する夢。この仕事を始めて、夢を見るようになった。大河を渡る橋は検問中で、濁流を呆然とみつめていると、巨大な蝸牛が現れ、人々を角に乗せて向こう岸へ渡す。タイミングを計って、角が縮んだ時に飛び乗る。思ったよりしっかりしていて安定感がある。高所恐怖症だが、不思議と恐怖はない…。これは、ちょっとした刺激のための仕事だ。今、灯りを消し、窓を開け放ち、外灯に群がる虫を見ている。乙女はじっとしたまま動こうとしない。床の上にひっくり返った甲虫が、脚をバタバタと動かし背中を軸に回転している。どうしても起き上がることはできない。なんという最期だ。三日後、甲虫はまだ生きていた。ひっくり返ったまま、脚をかすかに動かしている。僕には虫を起こしてやることもできた。でも、しなかった。これは、この虫の定め。そして僕の定めでもあるのだ。



編集後記

●映画『かすかな光へ』、漫画『江豆町』に触発され、地元密着型フリーペーパーをつくろうと思い立った。クロ新聞は単純に黒埼町の黒。旧黒埼町、西区に限定せず、なんとなく近所のものをというくらいの意識しかない。結局、個人的な日記のようなものになった。小説・ポエムを無くし、取材・広告など掲載したい。理想は毎月発行。現実には次回いつになるかわからない。●クロ新聞をつくるにあたって、いくつかの冊子を参考にした。ギャラリーろば屋『ロバ6月』からは、全体のテイストを参考にさせてもらった。自分なりに文学的な感じにしようとがんばったつもり。デザイン面では、手部『いばしょ新聞』を参考にした。『いばしょ新聞』よりビジュアル要素が少なく、自由な感じにはならなかった。その他、中央ヤマモダンさんが発行しているフリーペーパーからは「毎月つくる」という心意気や、印刷代がかかってそうなところに感銘を受けた。また、黒埼町をあつかった本で『黒埼町の今昔』（宮田栄門著、五十嵐政人編集）というすごい本がある。ちゃんと読んでないけど敬意を表したい。

クロ新聞　二〇一二年　七月号

発行所　クロ新聞工場

〒960-1122
新潟県西蒲原郡黒埼町大字木場
090-6141-8386
karafutoneko@gmail.com